

消せない呪いだけれども

マリア

ふわっと髪が舞う。空きっぱなしの窓から、暖かい風がふき、ピンク、のような色をした花弁が目の前でひらひらと布団に落ちた。この部屋にしてみらつて本当に良かった、なんて思いながら目線移すと、茶色や白、ピンクらがぼんやりと見える。きつとそれは桜なのだろう。昨日、母がお見舞いに来た時に、もう家の周りの木にも桜が咲き始めたと、私の手を撫でながら教えてくれた。でも、もう私の目にはほとんど何も映らないのだからうつすらと見えた花弁を目に近づけてピントを合わせ。やっぱ桜だ。なら、もうすぐ咲くはずだ。あと三ヶ月もしないうちに、私のあの大嫌いな花は、私の大好きな人を連れてやってくるのだろう。

でもきつと。私はそのどちらも見ることが出来ない。

ガラガラと丁寧にドアを開ける音が聞こえる。これはきつと祖父だろう。目が効かなくなると、耳が良く冴えるというものだ。

カンカンと下駄のなる音がする。私は祖父が、あるひとつの下駄以外を履いているところは見たことがないのだけれど、きつと今もそれを履いているのだろう。亡くなった祖母が、最期に祖父のために作った下駄だそう。残念ながら、祖母は私が生まれる前に亡くなってしまったので、その話は母から聞いた話ではない。でも、どれだけボロボロになっても、手直しをして履き続けているところを見ると本当に大切なのだと思う。

「元気にしとるかあ」

祖父の掠れた低い声にコクッと首を振って頷く。目もほとんど見えない、声も出ない私に残っている伝達

手段は、もう動きしかない。

「そうか。ならよかったわ」

他愛のない話をする祖父に私は適当に首を振って相槌を打つ。最近あった出来事とか、祖父の昔話とか、祖父がここに来る日は毎回聞かせてくれた。祖父がここに来る頻度は低いが、毎週一回は必ず来てくれる。たくさん土産話を持って。気を使ってくれているのか、孫のことを単純に見に来てくれるのかは、母と違って声色からは全く予想がつかない。私が入院するまでと大して変わらないから。だけど、私に対する姿勢は、私には心地よかった。

「……そういうばあ」

普段は、厳格で堂々としていて、歳を感じさせないほどハキハキと話す祖父にしては珍しく、口ごもっていた。

話を促すように首を傾けると、何故か観念したかのように話し始めた。

「実はなあ、再来週、菫苑がこっちに来ることになってな」

どんな話かと、ある程度心構えはしていた。しかし、その予想を遥かに超える発言に、出るわけが無いが、言葉が詰まる思いだった。

菫苑、それは私の大好きな妹だ。腹違いの。

私の父は、浮気性かつDVをする男だった。父と母は政略結婚という訳では無いが、いわば許嫁の関係だった父と母。当人同士は望まない結婚だった。性格は亭主関白、元々浮気性ではあった父。しかしDVをするようになったのは私のせいだった。そもそも私を産むことにいい顔をしていなかった父は、私が声の出

ない欠陥品だとわかった幼少期の頃に、まず母に暴力を振るい始めた。だから産むなと言っただろ、おまえもあいつも消えてしまえ、恥ずかしくて外も歩けん。数々の罵詈雑言、暴力とともに、母は本当に外に出れない体にされてしまった。

私が小学生の頃に、父には本命の人がいたことが発覚した。私が見てしまったのだ。父と知らない女の人がキスしているところを。その場からはすぐ去ったものの、私が見ていたこともバレていた。それから、父は私にも暴力を振るうようになった。あの日、なけなしのお金で買った父の日の黄色いバラとともに全てはねのけられた。その後、母と2人でずっと、ずっと耐え続け、そして。あの日、私の目はほとんど見えなくなる、呪いにかかってしまったのだ。

その日は父の機嫌が悪かった。元々酒癖が良くなかった父だが、私が学校から帰ってきた時にはすでに泥酔。そして。父が母に酒瓶を振りかぶっているところが目に入ってきた。

私からすれば、母は戦友のようなものだった。父の酷いDV、虐待と一緒に耐えてきた仲間意識が芽生えていた。私は情に厚い人間だったようで、気づくと、母の耳を劈くような悲鳴が聞こえてきた。目を開けようにも、瞼と眼球に何かが刺さっているようで全く動かない。意識が戻ってきてても、声は出ない、目は開かないのだから、母には私の意識が戻ってきたことにも気づいていないだろう。息の吸い方を忘れるほどの痛みに、また、私の意識はブラックアウトしていった。

次に気づいた時にいた場所は、病院だった。一番最初に目が開いた時に見えたのは、ごめんね、ごめんねと謝り続ける、母のくしゃくしゃの泣き顔だった。

さすがにここまで事が大きくなれば、私の家庭のことはバレるわけで、父と母は離婚した。このことに責

任を感じた父のお父さん、つまり私の祖父は、私たちの前で土下座した。息子がすまなかったと、病院の個室、汚いだろうフロリングに額をつけて。別に祖父が悪い訳では無い。悪いのは父であるのだと、母が言おうが、私が言おうが聞かない頑固者の祖父は、今も定期的に見舞いにくる、優しい祖父でもあった。

しかし、誰が何をしようが、酒瓶で殴られた時に割れた破片が目刺さったこと。現代の医療ではもうどうしようも出来ないことに変わりはない。

そして今に至る。医者……先生の話では、私の目が機能してくれるのは長くてあと一ヶ月だそうだ。しかし、私の目はきつとそんなに持つてくれない。悪化するスピードが早すぎると、先生は教えてくれた。眼球だけでなく、そもそも瞼の神経もきれかかっているため、瞼を自力で持ち上げるのは二秒が限界。ほとんど何も見えない。だから私の予想では、もう二週間後には目が見えなくなると考えていた。再来週、目が見えなくなるのが先か、莉苑が会いに来てくれるのが先か、どっちが先でもおかしくない。

「まあ、莉苑が来るのは再来週だからな。考えることがあっても後でいいなあ」

下を向いたまま、うんともすんとも動かなくなった私の考えを汲むように祖父は話題を変えた。そして、しばらく話した後、祖父は下駄をカタカタと鳴らして病室を出ていった。

桜は完全に散って、そろそろ新緑の芽吹きが見えるころ。私は毎日お昼すぎにやってくる母とおしゃべりしていた。どうしても腫れ物を扱うような話し方になるのは、母には一生拭えない罪悪感があるからだろう。守れなかった、逆に守らせてしまった。その上、目は見えなくなってしまうのだから。私からしたら大切な

人を守れたのだから問題ないのだけれど、そんなことを言うのは野暮というもの。それでも、私の顔を見て泣くことも無くなり、二人で楽しく話せるようにまでなつたのだから、幸せに思うべきだろう。事実、私は幸せだ。

そんな折、突然起こった。いや、元々告知はされていたのだから、突然という訳では無いのだけれど。「久しぶり！ 元気にしてた？」

ぱつとまるで花が咲いたような笑顔を浮かべていたのは、私の大好きな妹であり、親友の莉苑だ。

私と莉苑が親友というのは、母の時に例えに使った戦友とは違う。紛れもなく私と莉苑は親友だ。莉苑の中では。莉苑と私は同い年で、奇跡的に同じ学校に通っていた。声も出ず、学校からは波風をたてないようにと避けられ、一部の人に虐められていた私に、唯一友達になってくれた人だ。莉苑は、あの父から生まれたとは思えぬほど優しく、気高い女性だった。私が虐められていると知ったら私を助け、私が莉苑の金魚のフンと呼ばれていることに気づいたら、私にとり構わず大好き、いつもありがとうなんて言って私のことを救ってくれた。守ってくれただけでなく、救ってくれたのだ。もしも、莉苑が私の妹だと知らなかったら、私と莉苑は本当の親友になれただろう。もし、莉苑に何かあったら私が何とかすると決意して。でも、知ってしまったのだ。あの時のように、見てしまったのではなく、向こうから私の病室にやってきたのだけれど。父と莉苑が仲睦まじく入ってきて、父だと莉苑に紹介された。その時、聞かされたのだ。莉苑がいない隙に、莉苑は私の妹であり、私が生まれた年に莉苑も生まれた。だから、欠陥品であり父にとっていらぬ子である私に暴力を振るったことも。笑顔で語ってくれた。その時、私と違い、莉苑は蝶よ花よと育てられたこと

に気づいた。苦しくて、上手く息が出来なくなり、思わずナースコールを押した。すると、さすがにまずいと思つたのか莉苑が戻ってくる前にさっさと帰ってしまった。だって、父と母が離婚した時の条件に、私と母とは二度と会わない。そうあつたのだから。もちろん、祖父にも勘当されていた。その時ようやく理解した。父は根つからのクズだと。腐つても私の父だ。捨てきれない感情もどこかにあつたけれど、欠片もなくなつた。

それからだ。莉苑のことを真つ直ぐに見られなくなったのは。莉苑が何も悪くないことは分かっている。莉苑は私のことを救ってくれたことも。本当に大好きな親友なのだ。でも、莉苑が私の妹として大切に育てられた事実、割り切れない思いが交差して、それから莉苑と会えなくなつてしまった。祖父と父は勘当した身とはいえ、莉苑からしたらおじいちゃん。だから、祖父を通して莉苑が私のところにできるかぎり来ないようにしてもらっていたが、それも限界があつた。莉苑は来てしまった。しかも前と同じ、私の大好きな花を持って。

それは黄色のバラだった。一般的に、白や寒色系の色の花は病院に持つていくものではない。お悔やみを表すものでもあるから。だから基本、お見舞いなどには暖色系が好まれる。しかし、黄色のバラ。これは、よく父の日に送られる代表例であつた。そう、私が跳ね除けられた愛情。私の大嫌いな花。でも、そんな事情を莉苑が知るはずもない。

「どうしたの？ あんまり今は元気じゃない？」

けれど、莉苑の声を聞くとすつと心が晴れるのも事実だった。たとえ、莉苑が私より恵まれた環境で過ごしているようが、私を救ってくれた莉苑に嘘は無い。私からすれば、莉苑は妹よりも前に親友なのだ。私の大

好きな。

首を横に振ると、莉苑は安堵した顔を見せる。

そして、本当に綺麗に笑った。

この気持ちは、呪いのように一生心に渦巻くものかもしれない。でも、莉苑が私の親友、恩人であることに、救ってもらう度に返したいと、少しずつ思ったことに嘘は無い。だから、莉苑にこのことは言わない。父のことを話すと、莉苑は絶対に自分を責める。自分が悪くなくても。そこは祖父に似たのだろう。これは、私が莉苑にできる最大の恩返し。だから、私はこの気持ちと引き替えに得た、私の大好きな笑顔と一緒にこれからも歩んでいく。

# 消せない呪いだけれども

令和5年10月12日

著 者 マリア  
発 行 者 鈴木 征浩  
編 集 谷口 里穂  
発 行 opsol book  
opsol 株式会社 opsol book 事業本部  
〒 519-0503  
三重県伊勢市小俣町元町 623 番 1  
TEL 0596-28-3906  
FAX 0596-28-7766  
MAIL info@opsolbook.com  
WEB <https://opsolbook.com/>

本書の内容の一部、または全てを無断転載・複写・デジタル化・  
アップロード行為は著作権法上の例外を除き禁止されています。